ゲ
G
ST

本文抜
《『仮面ライダー』は正義のヒーローを否定している／ロックは宗教か？／なぜ宗教は臭いのか／優れているロックは人を縛るのではなく解放する。囲い込むのではなく卒業させる。》

「世界はエグザイルと西野カナとジャニーズとアイドルがいれば成立する。それはマスコミと大衆を眺めていれば分かる。その安定した世界に、「これこそが正義である！」と世の中に割って入ろうとするのは安定した世界からすとただ迷惑なだけだ。」

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！
これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。。
音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、
20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。
今回は、サムライフラメンコを軸に、神聖かまってちゃんについて語っていきます。

神聖かまってちゃんとサムライフラメンコ

——大人になりたくない大人たちへ贈る、愛と正義の物語

『サムライフラメンコ』（二〇一三～）というアニメがある。

内容をざっと紹介しておこう。改造手術も受けず、特殊な能力も持たず“自力で”正義の味方になってしまった男・羽佐間正義。彼は幼い頃観たヒーローマンガに憧れていた。青年になり、ファッションモデルで働くかたわら、夜はマスクで顔を隠して町を巡回し、必要とあれば正義の味方「サムライフラメンコ」を名乗り、様々なトラブルを解決しようと奮闘する。彼に出会ってしまい、以後さまざまなトラブルに巻き込まれてしまう警察官・後藤英徳の二人を中心に「正義の味方」として活動する困難さや意義を描く。

七話まで「現実社会の中でのヒーローごっこ」を丁寧に描いてきた。↓

動かすアニメ
Vol.33
佐藤順一の世界
「ノワール」特集
ヒーロー現る！
ANIMATED HEROLHERO'S COLLECTION
『サムライフラメンコ』
『〈物語〉シリーズ セカンドシーズン』
『キルラキル』『ノブナガ・ザ・フール』

七話まで「現実社会の中でのヒーローごっこ」を丁寧に描いてきた。サムライフラメンコのやることといえば、ゴミのポイ捨てや傘の盗みを注意する程度だった。

現実世界では悪の組織が日本征服などしないからだ。

例えば、『ウルトラマン』（一九六六）は↓

例えば、『ウルトラマン』（一九六六）は明確な敵がいた。怪獣が日本に現れた場合、科学特捜隊のハヤタ隊員はウルトラマンの力を借りてそれを退治する。日米安全保障条約によって、他国が侵略してきた場合に日本はアメリカの力を借りてそれを殲滅させてもらわなければならないという、当時の社会意識の比喩だと『ウルトラマン』は言われている。そのように、悪を設定して正義を置く物語はぼくらの世界に繋がっている。なぜならば、現実の世界にいるぼくらに対して作品の説得力がなければ物語が陳腐にみえてしまうからだ。いまウルトラマンシリーズが盛り上がっていないのはそれが足りないからだろう。

強くそう感じるのは平成になって仮面ライダーシリーズが盛り上がっているからだ。
ルーツがまず凄い。↓

強くそう感じるのは平成になって仮面ライダーシリーズが盛り上がっているからだ。ルーツがまず凄い。『仮面ライダー』（一九七一）は「正義のヒーロー」を否定するところからスタートしているのだ。

平山亨プロデューサーの述懐によれば、それを言い出したのは『ウルトラマンA』メインライターの市川森一だそうだ。

「正義のために戦うなんて言うのは止めましょう。ナチスだって正義を謳ったんだから、正義ってやつは判らない。悪者とは、どんなお題目を掲げていても人間の自由を奪う奴が悪者です。仮面ライダーは、我々人間の自由を奪う敵に対し人間の自由を守るために戦うのです」

（『平山亨叢書１・仮面ライダー名人列伝』

↓

　主人公の本郷はショッカーに人体改造の手術をされてしまう。脳の改造が行われる寸前で逃げ出すことに成功し、ショッカーと戦うことになる。当時、公害問題が大きな社会問題となっており、仮面ライダーや改造人間の人体が変化してしまうのはその比喩だとされている。
　それは本郷が悲しみに満ちているからだ。↓

例えば、子どもを励まそうと手を握った本郷はあざができるほど強く握ってしまい、

「おれはショッカーによって、子どもをもあやせられない体になっていたのだ」

と言う場面がある。元の生活や普通の人生を歩めなくなったことがよく分かる演出だ。ウルトラマンは変身前、人間のままだから生活レベルでの不自由さはまったくない。仮面ライダーは身体が異常強化された人造人間だ。しかし、顔は元の人間のままだ。その悲しみを隠すためにマスクを被っていると考えればホロリとくる。

現実には、日本征服を企む悪の組織は存在しない。↓

　現実には、日本征服を企む悪の組織は存在しない。しかし、健気に生きる人の自由を奪う者はいる。小さい確かな悪を描写しているから『サムライフラメンコ』はヒーロー作品として説得力がある。虐められている青年を助けたり、ゴミの早出しを注意するなどがそれに挙げられる。
　一件バカバカしいが、「あるある！」「そうだよね」と視聴者に思わせることができる。さらに、警官である後藤が「視聴者目線のツッコミ」を入れている描写によって、アニメだけど世界線は現実なんだと視聴者は錯覚する。

しかし、八話以降でその隙を突く。↓

非現実的な悪の組織が出現し、日本を征服しようと人をガチで拷問にかけたり、あるいは殺してしまう。『サムライフラメンコ』は現実と同じ世界線だと思っている視聴者は「マジで！？」と思う。視聴者が優位に立っていた七話から一気に予想がつかない展開になり、「もしかしらありえるかもしれん」とその優位性が一瞬にして逆転する。悪の組織のボスは主人公のサムラサイフラメンコと同じく、幼い頃からヒーロー番組を見て育ったことが明かされる。しかし、彼は悪に対してロマンを感じたと言う。正義と悪の曖昧さが突きつけられる場面だ。

いま、この日本で現実にそのような征服を企む悪の秘密結社はない。↓

いま、この日本で現実にそのような征服を企む悪の秘密結社はない。あえて考えてみると、それに当てはまるのは「宗教」かな、と思う。その単語を聞くと多くの日本人の場合は、ノータイムで拒否反応が出るからだ。ぼくも身構えてしまう。その国民意識は松本サリン事件を起こしたオウム真理教が原因とされているらしい。

しばしば、ロックは宗教と言われることがある。↓

しばしば、ロックは宗教と言われることがある。そう言われるときは決まってネガティブな意味なので全力で「違うよ」と反論するが、確かにそうだよなあと思ってしまう面はある。人をある思想のもとに集合させ、指示したら大勢が動く影響力をもっているからだ。その動員力はたしかに宗教ともいえる。

無宗教な日本人のなかで我々はやはり悪で、気持ち悪いのか。↓

01

1st STATION

運命のベルが鳴る

無宗教な日本人のなかで我々はやはり悪で、気持ち悪いのか。

例えば松下幸之助の商売の考え方は多くの日本人に共有されている。でもそれは「人格者の」社長であるところがポイントで、「仲良くみんなで儲けよう」宗教になっていないか。作家の與那覇潤は、よく「日本人は無宗教だ」というけど、それじゃ協会みたいな「宗教施設」に行かないからそう見えるだけで、社長の訓示が牧師の説教の代わりをしているだけ。利益で釣るよりお説教で人を改心させて人を動かそうという発想が、儲けてなんぼの組織にまで浸透しているのだから、逆に世界一の宗教的な国かもしれない、と言っている。依存しやすい国民性を考えると世界一の宗教国家ということも納得できると思った。

しかし、その松下宗教で日本の個人がもっている社会水準が高く保たれている気がする。

そう考えると、宗教は決して悪いものではない。↓

しかし、その松下宗教で日本の個人がもっている社会水準が高く保たれている気がする。そう考えると、宗教は決して悪いものではない。とはいえ、最終的に悪と正義を決定づけるのはその時代の価値観とマジョリティだから、JAPANのなかの正義のバンドが世間から見れば悪というのはザラだ。

なぜ宗教に臭さを感じるのかというと人の主体性を壊しているという印象だからである。だから「洗脳」というネガティブな言葉が連想されてしまう。ロックもそれに当てはまることは否定できない。

しかし、優れているロックはそうではない。人を縛るのではなく解放する。囲い込むのではなく卒業させる。

主体性を壊させないのが優れたロックだ。↓

神聖かまってちゃんは悪かもしれない。「こんな世界ぶっ壊してやる」と意気込むのがロックバンドだからだ。怒髪天の増子は「ロックはテロ」という言葉を残している。

世界はエグザイルと西野カナとジャニーズとアイドルがいれば成立する。それはマスコミと大衆を眺めていれば分かる。その安定した世界に、「これこそが正義である！」と世の中に割って入ろうとするのは安定した世界からすとただ迷惑なだけだ。

アメリカの作家リチャード・マシスンのSF小説で『地球最後の男』という作品がある。↓

アメリカの作家リチャード・マシスンのSF小説で『地球最後の男』という作品がある。ウイルスで全人類が吸血生物になった世界で「ロバート」は抗体をもっており、独りだけ生き残った。人類を元に戻そうと吸血生物を狩って、薬の開発をすすめた。終盤、凶暴にみえた彼らには知性があり、同生物でコミュニケーションを行う集団性をもっている「新人類」であることが分かる。自分こそが街を徘徊し、「人々」を殺戮しまくる伝説の怪物であることに気づくのだった。

結局、正義を決めるのは大衆である。それを思えば、ロックバンドは悪だ。結構迷惑だし。

しかし、ロックは必要だ。↓

しかし、ロックは必要だ。

大衆になりきれなかった者がいる。彼らは休憩時間に人と談笑することなく、席を立つ理由もなく、ただ息するだけの塊。彼らは本来なら正義のヒーローによって救われるべき存在だ。悪の秘密基地に場違いながら居て、生きたまま殺すというのはこのことである。現実は非情だ。手を差し伸べてくれる人は現れない。期待をもつ話はたくさんあるけれど、自分のことを話せる人に出会わずに終わる人生だってあるのだ。

暗い部屋のすみっこで体育座りをしてすすり泣く。そんなとき、心を撫ででくれる看護婦がいる。それがロックだ。我々は、正義の味方が正義しか救わないことを知ってしまった悲しい旅人である。だからそれ意外を探す。そこに神聖かまってちゃんはいる。彼らの楽曲にはこぼれ落ちた者たちを根こそぎ持っていく力があった。悪で結構！悪最高！悪即斬！

　人間の自由を奪う敵にたいしてマスクの下で泣きながら戦っているのが仮面ライダーなら、ロックバンドは人間の自由を奪う敵にたいして戦っている仮面ライダーとも戦っている。彼らが行っている事を否定しなければ救われない者がいるからだ。
　神聖かまってちゃんはその救われなかった者のために戦う。大人になりきれなかった大人なりの戦い方があることを神聖かまってちゃんは教えてくれる。←

うおお

神聖かまってちゃんとサムライフラメンコ ーーー大人になりたくない大人たちへ贈る、愛と正義の物語

http://p.booklog.jp/book/83751

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ